京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第二十五卷　第五號

昭和二年十一月一日發行

大正四年六月二十一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

（無　轉　載）

論叢

利子の泉源について……文學博士　高田保馬

租稅に於ける家計……法學博士　神戸正雄

近世貿易の趨勢……文學博士　三浦周行

德川時代に於ける長崎の支那貿易……文學博士　矢野仁一

普遍化了解科學……文學博士　米田庄太郎

文化現象の凝集作用……法學士　恒藤恭

說苑

岡山藩の自營船廠……經濟學士　黑正巖

雜錄

明治維新の成否に關する維新當時の一觀察……經濟學博士　本庄榮治郎

產業界變動の豫測……經濟學士　大塚一朗

海上保險の發顯地に關する一異說……經濟學士　近藤文二

戰前戰後の歐洲財政……經濟學博士　汐見三郎

徳川時代に於ける長崎の支那貿易に就いて（一）

矢野仁一

一　支那貿易船の長崎通商起源に就いて

長崎に支那貿易船の渡來することになつたのは何時頃からであるか。西川如見の享保四年の編著長崎夜話草[1]に據ると、それは永祿五年（西暦一五六二年　明嘉靖四十一年）と云ふことになつて居る。

長崎の津に唐船來りし初めは永祿五壬戌の年津の内戸町と云ふ浦に到りぬ

熊野正紹の寛政四年の編著長崎港草[2]も之に據り、矢張り永祿五年起源説を採用して居る。

夫れ長崎港に唐船の來りしことは、永祿五壬戌の年戸町の浦に來り、又其比までは明の世にて、日本渡海は許されねども、海邊村里の商人とも、竊に船仕立て、五島、平戸或は薩摩の浦々に來れる船もありしなり、積來れる貨物は磁器、端物、藥種、砂糖の類なりし、其後黑船屢〻來て、里人繁華に習ひ、萬の珍貨を好む世となりしかは、唐土人も樣々の珍らしき美麗の織物なども多く持渡りしとぞ、殊に長崎は船繫りよき港なれば、夫より入津の唐船も最と多かりしと也

西川如見の根據は明かでないが、必ずしも無稽の記事ではあるまい。通航一覽[3]は山本氏の筆記と云ふものゝ記事として、

1) 長崎夜話草二之卷唐船始入津之事
2) 長崎港草卷之五唐船初來の話
3) 通航一覽唐國總括部一渡來扱方

永祿の頃、明朝の商夫稀に小船にて、絲、端物、藥種等を積渡り貿易せしよし

の文を採錄して居る。山本氏は何時頃の人で、其の筆記と云ふものゝ史料としての價値如何も定むることは出來ないが、永祿起源說を支持する幾分の助けとはならう。

ルイス・フロイスの日本史[4]に據ると、西暦一五七三年即ち天正元年（明萬曆元年）頃長崎港に出入せる支邦貿易船の多かつたことは分かる。

Etwa 2 Meilen vom Haen von Nagasaki, am Eingang der Barre, hat ein Tono namens Fukahori dono (深堀殿) eine Festgang und Rente, ein Bruder des Isahaya (諫早) und der Frau des Dom Bartholomeo, dessen Eigenschaften dies sind; So wie seine Physiognomie und Körpergestalt sehr hasslich und Lächerlich ist, dementsprechend sind auch seine Wirke. Er ist ein Heide, ein grimmiger Feind des Gesetzes Gottes, äusserst habgierig und hat sich zum öffentlichen Piraten und groszen Kosiren, indem er die Fahrzeuge auf dem Meer wegnimmt, nicht nur die seiner Landsleute, sondern auch die der *armen chinesischen Kaufleute, die in ihren Soma nach Japan kommen, um Handel zu treiben,* während diese Fremden doch sonst in allen Gegenden privilegiert sind, um frei in den Häfen Japans ihre Waren zu verkaufen und einzukaufen, dieser aber lauert ihnen mit Trug und Habgier auf dem Meere auf, tötet sie dort, und raubt sie aus und nimmt ihnen ihre Fahrzeuge.

鍋島家文書に天正十九年（西暦一五九一年）の長崎に對する定め書がある。

定　　肥前國長崎津

一　喧嘩双傷事双方日本仁者不立入理非兩方可加成敗但南蠻船唐船之儀者異國仁之條理非遂（逐？）糺時十之物五ッ〳〵にをる

4) P. Luis Frois, S. J., Die Geschichte Japans, Kapitel, 100, S. 442

ては日本人可處罪科事

一　商買物安靡に為を可相究然て賣物に別の物をさしませ候はは可爲曲事事

一　賣買の物てんひん目かねて極置やりとり固てんひんたるべき事

右條々於違犯罪者縱雖爲異國仁速可致被處厳科者也

天正十九年六月朔日○秀吉の黑印

猶は鍋島文書に次の如き文書が見えて居る。

猶々濤虎糸其外商賣物、於長崎黑船取之由候條、何も不相違、悉申付可返付候、若於無沙汰者、可爲曲言候、以上、

月氏震旦高麗新羅百濟并諸外國廻船、至而日域相渡、於何之浦〻寓、船頭次第に令着岸、心安可商賣由、寂前被仰出候處、今度大明國がいゑん船頭新舟を造、かいゑんのロをあけ、商賣之唐船可令渡海之由用意候處、南蠻黑船者共、於薩州、右新船令違亂之由、如此以書付言上候、誠沙汰限不及是非候、自今以後於有其妨之者、可曲言候條、黑船中へ能〻入念可申聞候、去年も於長崎、かいゑんの商賣船を覆違亂、禮銀又は被船道具以下取之由申上候、於必定者遂糺明速可返付候、雖可被加御成敗儀候、異仁事候間、此度者被成御免候條、此以來儀堅可申聞候也、

九月廿三日

毛利壹岐守とのへ

黑田甲斐守とのへ

加藤主計江とのへ

鍋嶋加賀守とのへ

これは秀吉の書狀で、日下寬氏豐公遺文[5]にも言つてある通り、九月二十三日とあるのみにて、年號はないが、其の天正十九年であることは、舊修史局諸博士の考定せられた所で間違ひがない樣であるから、これまた當時既に支那船の長崎に出入せるものゝ多かりしことを證明するものと言はなければならぬ。

通航一覽[6]に外國入津記を引き、慶長五庚子年(西曆一六〇〇年)秋明朝の船肥前國長崎に渡來すと見え、其の註に、此事外國入津記の外、他に所見なけれども、永祿の頃、明朝の商夫稀に小船にて糸、端物、藥種等を積渡り貿易せしよし、山本氏筆記に載せ、また慶長の頃、彼國人亂を避て長崎に來り住せん事を願ふもの少からず、商船の渡來も其數漸々に多く、九州の內、薩摩國阿久根、筑前國博多、豐後國府內、肥前國五島、平戶、大村、長崎等の浦々に着岸せしよし崎陽記に見え、既に馮六といへる唐人、何時の頃渡來せしにや、和語をよく曉り、慶長九年長崎にて通事役を命ぜられしなれば、それよりしば〳〵渡來ありし事しらる、されども慶長五年には關原役の紛劇に依て、是等の事には拘らずして記錄も疎なりしなるべしとの文が見えて居る。慶長五年秋に明船の渡來したのは、必ずしもそれが最初と云ふのではない樣に考へて居る如くであるが、それにも拘はらず、同書[7]に按ずるに唐船の此津(長崎)に來商せし初めは慶長五年の秋、阿蘭陀國も同年和泉國堺に來り通商を願ひ云々との註文が見え、慶長五年の唐船渡來を支那船の長崎渡來

5) 日下寬氏豐公遺文三一五頁
6) 通航一覽卷百九十八唐國總括部一渡來扱方
7) 通航一覽卷之百四十九、長崎港異國通商總括部十二、商法入津改、

の最初と考へて居るのは、どうした粗漏なことであらう。

長崎市史[8]に唐商歐陽華宇、張吉泉二人が慶長の頃始めて渡來し、當時長崎の佛寺唯だ悟眞寺あるのみで、別に唐人の死者を管理すべき寺院なかりしを以て、悟眞寺の開山僧聖譽を訪問し、將來入津の唐人は盡く當寺の檀越たらしむることを誓ひしより、悟眞寺が在留唐人の菩提所となり、又二人相議して長崎代官末次平藏に依り唐人の埋葬地を得んことを幕府に請ひし結果、幕府は悟眞寺を唐人の菩提所と定め、百間四方の地を唐人墓地となすことを許可して朱印を賜はりしことが述べてある。さうして此の事件の起つた年は不明であるが、末次平藏が代官となつたのは、元和年間であるから元和年間乃至寛永初めのことだらうと云ふ考案が附してある。然るにマルドックの日本史[9]には何に據つたものであるか、長崎に於て支那人は西暦一六〇二年(慶長七年)稻佐悟眞寺の地に支那人の死者を埋葬すべき許可を得たと云ふことであるとの記事が見えて居る。

西暦一六一二年(慶長十七年)支那人が三十艘のジャンク船で到着し、大競爭を爲した爲め生絲や絹織物の價格が非常に低落したと云ふことが平戸の和蘭支店長ジャック・スペックス(Jacques Specx)の書簡に見えて居ることは、ナホッド[10]の十七世紀間和蘭東印度會社の對日本關係に述べてある。又平戸の支店長ヘンドリク・ブロウエル(Hendrick Brouwer)がバタニに送つた西暦一六一二年(慶長十七年)の書簡にも此の二年間此處に來た支那人は非常に澤山であつた爲め其處から來

8) 長崎市史地誌編佛寺部上、四八頁
9) James Murdoch, A History of Japan, Vol. III, The Tokugawa Epoch, 1652-1868, p. 272.
10) Oskar Nachod, Die Beziehungen der niederländischen ostindischen Kompagnie zu Japan im siebzehnten Jahrhundert, S. 155; Brief von Specx vom 2. November 1612, in Reichsarchiv im Haag.

る支那の貨物は儲からぬと云ふことを指摘[11]して居る。此等は當時平戸に支那商船の群集せしことを示すものなれども、それ程平戸に來たならば、又長崎にも來たことは想像されるから、それが同時に長崎にも群集したことを示すものではなからうか。

セーリス航海記[12]西暦一六一三年六月二十三日の條に、セーリスが二艘の支那ジャンク船の砂糖を積載して長崎に到着したる報を入手したことが述べてある。

コックス日記は西暦一六一五年（元和元年、明萬暦四十六年）から始まつて居るが、其の時既にアンドレア・ディッテス（Andrea Ditts）と云ふ支那人が平戸に居留し、其の長崎に居留せるホワウ（Whaw or Whow）と云ふ兄弟と共に、コックスの爲めに支那に於て英吉利の通商許可を得ることに盡力[13]して居る。此のアンドレア・ディッテス兄弟は支那の何省から來たものであるか分からない。それども南洋移住の支那人でないかとも思はれるが、コックスの西暦一六一七(八)年二月十五日平戸發東印度會社宛書簡[14]に、アンドレア・デッティス及び其の兄弟のホヲウが支那人のタッカ・サンガ(Tacca Sanga)と稱し、英吉利の海圖ではファーモサ島(Isla Fermosa)と稱せらるゝ島のピスカドル島(Las Islas Piscadores)と云ふ船舶の入津地に赴いて貿易する冒險家の最なるもので、昨年二艘の小ジャンク船を送り、交趾支那或はバンタムの何れの地で支拂ふ樣な價格の二分の一で生糸を買入れたと云ふことが述べてある。彼等が交趾支那やバンタムで生糸を仕入れつゝあつたこ

11) Oscar Nachod, ibid, SS. 156, XXXV.
12) The Voyage of Jahn Saris to Japan
13) Diary of Richard Cocks, 1615-1622, with Correspondence, ed. by E. M. Thompson, Vol. I, pp. 20, 23 以下
14) Cocks, Vol. II, p. 298-India Office. Original Correspondence, Vol. V, no. 615.

とは分かる。支那内地の人民であれば、態〻交趾支那やバンタムまで出かけて高價の生糸を仕入れる筈はない。臺灣で生糸の價格が廉いのは支那の廉價なる生糸が販運せらるゝからである。

ディッテス兄弟は支那内地の支那人でないとしても、コックスは彼等の外に別に支那に於て英吉利の通商許可を得る爲めに、リアング(Leangu, Lengo, Leangowne)と云ふ長崎居留の支那人を道具に使つて居たことは其の日記に見えて居る。[15] 又コックスの頻りに贈答を交換し、招待したり、招待を受けたりして居たナンキン・ニクワン(Niquan)、サンクワン(Sanquan)、シクワン(Shiquan)と云ふ樣な支那人始め、其の日記に幾度となく見えて居るゴクワン、ギクワン、ロクワン(Goquan, Giquan, Roquan)と云ふ樣な支那人は多く平戸に居つたのであるが、長崎に居留せる支那人も多かつたことは、其の日記、西暦一六一七年(元和三年)十一月二十三日の條に、五十餘人の支那人が長崎から平戸のアンドレア・デッティスの幼女を擧げたることを祝する爲め來たことが見えて居るにても想像される。

November 23.—The China Capt. sent me a fatt hog and 3 marchpanes for a present, having many Chinas com from Langasaque to vizet hym in respect of the berth of his yong doughter, the Chinas being above 50 persons; and each one hath brought a present, most of plate, and some of eatable stuffe.

15) Cocks, Vol. I, pp. 74, 223, 230; Vol. II, pp. 18, 19, 22, 271.

此の前日の記事にもギクワンと云ふ支那人及び長崎の他の一支那人はコックスを來訪し、蜜餞、酒、蜜柑、挑などを贈與したことが見えて居る。此の年十二月二十七日の記事に長崎の火事で燒失した二百餘戸の家屋中憐れな支那人の所有せるものも多かつたと云ふことが見えて居る。

This day the trew news came of the burnyng of above 200 howses at Langasaque, wherof many did belonge to pore Chinas,..... And Andrea Dittis and his brother, Capt, Whaw, had 3 howses burned, with 1 gedong, much goods being in it, as Andrea tould me.

崎陽秘集(長崎商工調査錄對支貿易記要引用)に、元龜元年(西曆一五六〇年)唐船一艘入津すとの記事が見えて居り、崎陽略緣記(同上引用)にも當地南蠻船の外に唐船來らざるにあらずとの記事が見えて居り、長崎集(同上引用)にも唐船の儀何國の浦にも入津して商賣致すといへども更に御構へなし、九州にては薩摩の內阿久根、筑前博多、豐後、肥前の內にては五島、平戸、長崎の湊、方々にて商賣致すとの記事が見えて居るとのことである。

慶長元和の頃既に支那人の長崎に往來貿易するもの丶多かりしことは明かである。然し當時は明の萬曆時代であつて、明では人民の外國に航海することを嚴禁[16]して居た。クムプフェルの日本史に西曆一六一一年(慶長十六年)から一六四一年(寛永十八年)頃まで葡萄牙人の日本貿易が隆盛を極めたのは、當時支那は明の統治時代で外國人との貿易が嚴禁され、支那人は外國に出でて支那固有の產物を輸出し販賣することを禁ぜられて居た爲め、和蘭人が支那人より生糸を得る道がなかつたに反して、葡萄牙人はマカオに據有して居た爲め、之を得る機會が多かつたからであると云ふこと[17]

16) 拙著近代支那論支那の開國に就いて參照
17) Engelbert Kaempfer, History of Japan, Vol. II. p. 216.

が述べてある。明では外國の中でも殊に日本に對して人民の出洋を嚴禁して居たのであるが、それにも拘はらず、長崎・平戸などに往來貿易する支那人の多かつたことは、彼等が貿易の利易を求めて禁令を犯して密航し來つたものに外ならぬ。顧炎武の天下郡國利病書[18]に明朝の海船を禁じて通番を許さゞりしことを述べ、それにも拘はらず、萬曆以來利に趨り航海する者の休まざりしことを記して居る。明が屢〻私通番國の禁を繰返へして居ることは、聽てそれが行はれずして私通番國者の多かつた證據で、當時長崎に來た支那人も此の類の者に外ならなかつた樣である。和蘭の日本支店長ブロウウエル（Hendrick Brouwer）は一六一三年（萬曆四十一年慶長十八年）二月十三日バタヴヰア總督宛書簡に於て、支那の船長等は支那皇帝に依り日本との貿易を禁ぜられて居るが、それにも拘はらず彼等は之を行つて居ると報告して居ることは、ナホッド[19]に見えて居る。

二　日本の外國貿易に於て支那貨物の重要なりしことに就いて

上に述べし如く、支那人は永祿頃より長崎に渡來し、慶長元和の頃に至つて長崎に往來貿易する支那人の數も頗る多かつた樣に思はれるのであるが、支那人の長崎渡來と共に長崎の支那貿易が始まり、又之に往來貿易する支那人の增加と共に、其の支那貿易が盛んになつたと云ふ譯では

18)　天下通國利病書卷八十五福建五
19)　Oskar Nachod. ibid, S. 156.

ない。葡萄牙人の長崎貿易も實は支那貿易であつた。當時日本の實際に需要したる貨物は獨り支那の貨物であつて、葡萄牙が長崎に於て貿易上の利益を收むることを得たのは、それがマカオの殖民地を有して、支那の貨物を仕入るゝ上に於て和蘭、英吉利などの有せざる便宜を有して居た爲めであつた。[1] 和蘭の日本通商の利益も其の支那貨物の貿易に依つて支持されたのである。アムステルダムに於ける和蘭東印度會社の十七人役員會が西暦一六一六年(元和二年)バタヴヰアの總督に支那に於ける貿易は和蘭人に閉鎖され、隨つて支那の貨物を日本に販運することが出來ないと云ふ理由で日本に於ける支店の放棄を諭告して居る。[2]

ブロウウェルの前記バタヴヰア總督宛、一六一三年(慶長十八年)二月十三日の書簡に於て、和蘭人は若し支那に於て自由貿易の目的を達することが出來なければ、其の日本貿易の利益は非常に少かるべし、其處では高き稅は徵收され、又葡萄牙人と戰はなければならぬ危險があるから、さうすると、强大な海軍力を備へなければならなくなると言つて、それよりはフォアモサ島に於て商館を開き、其處で支那人と支那貨物の貿易を行ふ方がよいと云ふ建議を爲して居るのである。

支那の貨物こそは純正な利益を擧ぐることが出來るもので、和蘭が一度マカオ出帆の葡萄牙カラック船を捕獲すれば、日本は印度に於ける最も有利な商店となるべしと云ふことは、西暦一六一六年ジャカトラ號の副上乘(Unterkaufmann)で後に平戸の商館長となつたレオナルド・カムプ

1) Oskar Nachod, Die Beziehungen der niederländischen ostindischen Kompagnie zu Japan im siebzehnten Jahrhundert, SS. 152, 153.
2) Oskar Nichod, ibid, S. 166; Murdock, ibid, Vol. III, pp. 259, 260.

ス（Leonardt Camps）の書簡[3]に見えて居ると云ふことである。

此のカムプスの西暦一六二二年（元和八年天啓二年）の報告に、和蘭が毎年日本に於て販賣すべき支那貨物に關し、原價一、〇〇八、〇〇〇「レアル」（約五百萬マルク）に對し、八五四、三七五「レアル」、即ち八割五分の利益があると言つてあることは、矢張りナホッドに見えて居る。[4]カムプスは和蘭人は恐らく支那貨物に對してポルトガル人より高價を拂はなければならぬから、從來のポルトガル人の買入値段より二割方高直に見積つて、買入元直を算出した樣に言つて居る。スペックスはバタヴィアに於て此の報告を受け取り、「若し和蘭が支那貨物の全貿易を占有することが出來るならば、但しよく運べばそれはさうなることは明かに免れ難いことで、さうして其の場合には和蘭布や其の他の和蘭貨物を除いても、支那貨物だけで猶は二千萬「レアル」だけを多く買入れることが出來る」と云ふ附言を添へて之を十七人役員會に轉送した。[5]ナホッドは和蘭人は日本に於て支那貨物の全貿易を占有することが出來なかつたから、カムプス、スペックス等の希望は、其の後只だ一部を實現することを得しに止まつたと評論して居る。[6]

日本の外國貿易に於て如何に支那貨物の重要であつたかと云ふことは、英吉利の初期の日本に對する貿易關係にも見はれて居る。英吉利が日本と貿易を開く匆匆、支那貿易を行ふに非れば、日本との貿易を維持する必要がないと考へる樣になつたことは、西暦一六一六（七年）一月一日發

3) Oskar Nachod, ibid, S. 166.–Abrechnung 1614–1616, im Reichsarchiv im Haag.
4) Oskar Nachod, ibid, SS. 182, 183, LXII, LXIII.
5) Oskar Nachod, ibid, SS. 183, LXIII, LXIV.
6) Oskar Nachod, ibid, S. 184.

コックスの英吉利東印度會社宛の長い書簡の終りにも、支那に對し貿易を開く望みあるに非れば、日本に留まる必要はない、然し此處には銀が十分にあつて、思ふ儘に之を持出すことが出來るが、それには彼等の好む樣な貨物を持つて來なければならぬ、支那人や葡萄牙人や西班牙人の持つて來る樣な絹を持つて來なければならぬ、それは常に現金で價格と共に其の分量を加減するのであると言つてある。[7] コックスの西暦一六一七(八)年二月十五日平戸發英吉利東印度會社宛書簡にも、自分は貴下と同樣な意見で、支那に對して貿易を開くことが出來なければ、日本に於て商館を維持することは、全然價値がないと云ふ意見であると述べて居る。[8]

西暦一六一五年十二月五日平戸發ラルフ・コッピンダル (Ralph-Coppindal) の書簡に、支那に於て貿易を爲すことが出來なければ、日本にては損失の外なし、支那の生糸は常に此處では現金であり、且つ頗る利益がある、自分の說としては、我々は支那で平和に貿易を行ふことが出來なければならぬ、然らざれば和蘭人の爲せる如く、强制に依つてゞも彼等と貿易を行ふ樣にしなければならぬ、二者何れかでなければならぬと言つてある。

7) Cociks, ibid, Vol. II, p. 288 山口高等商業學校東亞經濟研究第十卷四號英吉利の日支初期貿易關係
8) Cocks, ibid, Vol. II, 277.
9) Cocks, ibid, II. p. 271.